

福島第一原発

格納容器の弁開放へ

大地震で原子炉内の冷却水の水位が低下していた東京電力福島第一原子力発電所の1～3号機について、東京電力は12日未明、原子炉を覆っている「格納容器」の弁を開ける用意をしている、と発表した。これにより、放射性物質を含んだ「1次冷却水」が国内で初めて外部に漏れる可能性がある。

経済産業省内で東電と共同記者会見を開いた海江田万里経済産業相は「大気中に放射性物質を放出する可能性があるが、微量とみられている。陸地から海側に吹いている風向きを考えると、発電所から3キロ以内の避難、10キロ以内での屋内待機で安全性は保たれている。住民には落ち着いて事態に対処してもらいたい」と述べた。

東電によると、弁を開放する時間は未定。同社の説明では、原発の格納容器の中は通常、400キロ

パスカル（約4気圧）で運転され、800キロパスカルになると圧力容器を損傷する恐れがあるため、弁を開ける規則を設けている。すでに1号機の圧力は、600キロパスカルにまで上昇しており、弁を開け内部の圧力を安定させる必要性が高まっているという。

原子力安全・保安院の寺坂信昭院長は12日午前6時すぎ、記者会見を開き、自動停止した東京電力福島第一原発の正門付近で、1時間当たりの放射線量が通常の8倍の0.59㊦シーベルトに上昇したと発表した。1号機の運転、管理をしている「中央制御室」では1千倍の線量が観測されているという。

これに伴い、周辺住民に対する避難指示の対象を、これまでの半径3キロ以内から半径10キロ以内に拡大させた。